
心豊かに音楽でつながる子どもの育成

小 学 校 松井 見磨、松本 一葉
中 学 校 三棟 優子
研究協力者 楠 俊明（愛媛大学）

1 主題設定の理由

心や身体が共鳴するような音楽に触れたとき、そこには感動が生まれる。同じ空間で呼吸を合わせて歌う喜びを味わうこと、仲間と共に空気を揺るがす響きを共有することは、当たり前に行えることだと思っていた。しかし2020年、世界的なコロナ禍でそのような音楽は消えていった。過去と現在の時間軸が分断されたことで、あらゆるコミュニケーションが急速にオンライン化され、音楽もまた、優れた音源や映像技術等と共に変化してきている。

しかし私たちが特に考えたいのは、実際にその場の空気や音、色合いや雰囲気を感じ、自分の目と耳と心で確かに行うことによって身体に染みていく経験なのである。美しい言葉や目前の対話によって心が通じ合うように、本物の生きた音楽との出合いを大切にしたい。音楽の力でつながった心や、そこでの感動は、着実に子どもの中に“音の記憶”（『幼年教育研究紀要2010・初等教育研究紀要44号』）として紡がれていくからだ。心を動かす経験を積み重ねることによって“音の記憶”は広がったり深まったりする。そこで必要なのが、美しいものに感動するといった柔らかな感性ではないだろうか。このような柔軟な感性を育てるには、美的情操の育みは欠かせない。

前期研究において、美的情操のよりよい育ちを促すためには、感覚感情だけでなく知的な要素と結び付けた理念形成を行い、子どもたちが音の記憶を生かしたり、自らの感性や創造性を発揮したりしながら、自分にとっての価値付けを主体的に行っていく過程が大切であることが確認できた。その学びの過程、すなわち音楽を「そうぞう」している子どもは、音楽科の特質を生かした「見方・考え方」を働かせて、心の動きを伴いながら、自分自身の音楽の世界を広げたりつないだりしようとする。そして、心の動きを伴った音楽活動を経験することによって、子どもの“音の記憶”は深く広がっていく。そうした経験を紡いでいくことが、子どもが学校で音楽を学ばなくなる年齢や環境に達したときにも、一人一人が自分の好きな音楽を自ら学習したり楽しんだりすることができるよう、文化としての音楽の理解を深めていくことにつながるのではないだろうか。音楽的感受性や美的情操を基に、知性と感性の調和のとれた豊かな心や、他人を思いやる優しさ、共感したり価値観の違いを認め合ったりすることのできる温かい心などを育むことが、未来を拓く力の育成につながると考えた。

以上のことを踏まえ、上記の本研究主題を設定した。

2 音楽科における「子どもと創る『深い学び』」

(1) 子どもと共に学びをつなぐ音楽科の授業づくり

ア 音楽科における「深い学び」とは

子どもは新しい音楽と出合ったとき、自分を音楽に開き、前向きに音楽に取り組むことが大切になってくる。そしてその音楽とつながりたいと思うかどうかを考えるだろう。まず、このつながりたいと思う心を持たせることが、音楽を通じて自分を生かしていくことの鍵となる。音楽をしっかりと受け入れ、新しく自分の中に“音の記憶”として蓄積していくことができれば、その後かかわる音楽や違う価値などに触れたときには、自分の価値と照らし合わせたり、

その価値を膨らませたりするなど、おのずと対話的な学びを促し、主体的な学習活動を通して、「深い学び」につながるものが分かってきた。また、知性と感性の往還を伴う学習展開も深い学びを支えることになるだろう。さらに、そのような学習が音楽科での学習だけにとどまらず、他教科等へ生かしたり、子どもの生活や社会で発揮したりできるように、そしてどのようにつながるのかを教師が意識していくことが大切である。したがって、音楽科における「深い学び」とは子どもが「学習材」「他者」「自分自身」とかかわる中で、子どもがそれらとつながる手立てを教師が講じることで、結果として、子どもが心を動かしながら音楽とかかわり、紡がれてきた“音の記憶”を生かし、発揮しようとする姿が表れる学びであると捉え、研究を進めていく。

イ 子どもと共に学びをつなぐ音楽科授業

子どもは、多様な音楽体験や音楽経験を通して「どんな音が鳴るのかな?」「どうしてこの曲を聞くとわくわくするの?」といった音や音楽、課題などと出会う。そして、「ささやく音ってどのくらい?」「こんな様子を表してる音かな?」と想像したり、「一緒に弾いてみるどうなるのかな?」「ちょっと、ずらして鳴らしてみよう!」と創造したりしながら追究する。この追究から「そうだったのか!」「もっとやってみたい!」「なるほど!」と課題解決の過程や体験、感動経験を振り返り、学んだことや自分の変容を自覚することで、自分にとって価値あるものとして獲得され、次の学びにつなげることができる。

そこでの教師の役割は、子ども自らが「学習材」「他者」「自分自身」とつながり、かかわり、感動経験を重ね、心を動かしながら学ぶことができるようにすることである。そのために学びの過程において音楽的な「見方・考え方」を働かせ、「他者」と協働できる場を授業に組み込んだり、子どもと音や音楽との接点を多面的につくったりする必要がある。

しかし、音楽の本質を見詰めて追究するそうぞうの過程や、目指す音楽は十人十色であるので、子ども一人一人の個性を生かしたものでなくてはならない。それぞれをしっかりと認めながら見詰めていく教師の力が大切である。子どもたちだけの協働にならないよう、教師のかかわりも子どもが主体的にそうぞうすることにつながる重要なものと言えるだろう。

(2) 子どもの学びをつなぐ指導の手立て

ア 「学習材」とつなぐ手立て（主に「見方・考え方」との関連）

1年次は、夢中になれる音楽や学習課題との出合わせ方や、題材へのアプローチの仕方を工夫することで、子どもの課題意識を醸成することに大きく関与することができた。学習材との魅力ある「出会い」が、子どもが音楽とつながる意欲を喚起し、持続させたと言える。さらに、新しい「出会い」や未経験の取組などにおいても、子ども一人一人の内に培われた“音の記憶”を手掛かりに、音楽的な「見方・考え方」を生かしながら、楽曲の持つ面白さや価値に気付いたり、主体的に音楽と深くかかわったりしようとする姿が見られるようになってきた。

さらに、子どもが音楽的な「見方・考え方」を生かし、働かせることができる授業を展開するには、こうした「出会い」の場の工夫だけではなく、子どもの見取りを生かした、多様な発想を引き出すための、教師による思考の揺さぶりが大切であることがわかってきた。

そのためには、資質・能力が育成された子どもの姿を具体的に想定し、目の前にいる子どもの実態を多面的に捉えた上で、毎時間の授業で変容する子どもの姿を見取れる視点を持つておかなければならない。そうすることで、子どもは「出会い」の場面で醸成された課題意識を持ちながら、個々がそれぞれの“音の記憶”と向き合い、音楽的な「見方・考え方」を生かして主体的に学習活動を展開し、課題解決に向けての学びの質を深めることができると考える。

イ 「他者」とつなぐ手立て（主によりよい「対話」の在り方・方法）

「出会い」の場面で、子どもが学習材とつながって、より深く自分の表現に向き合うことができるようになってくると、自分の心の中にある思いや音楽を使って、仲間とつながっていかうとするだろう。このように、音楽を奏でて人と心でつながることが、大切な音楽的「対話」である。この音楽的「対話」が成立することが、生きた音楽が生まれる重要な鍵である。音楽の力で仲間とつながり、仲間の音を感じながら表現することによって、他者とつながるすばらしさが“音の記憶”として蓄積される。また、音楽を聴く活動では、音の世界の広がりや個々に委ねられることが多いが、音楽から受ける印象や感動を互いに認め合ったり、聴き合ったりする場を保障することでコミュニケーションは深まっていく。つまり、それぞれの表現活動や鑑賞活動の場で差異に気づき、様々な思いや表現を共有したり認め合ったりすることが大切になってくる。

また、多様な人々とのかかわりを必要とする場面を意図的に創り出すことも重要である。音楽科では、授業の始めに「今月の歌」やリズム遊び、歌遊びなどの常時活動を行っている。短時間の積み重ねであるこの活動は、音楽の基礎的・基本的な知識や技能を習得できる中学校までの9年間を見通した系統性のある活動であるが、「他者」とのつながりを意識した活動も取り入れている。音楽活動の始まりを「他者」とのかかわり合いで進めることで、コミュニケーションが苦手とかかわりが希薄だった子どもが、その後の本活動でも、自然に互いの思いや考えを認め合いながら対話し、音楽を創造することに喜びや手応えを感じている姿が徐々に見られるようになってきている。

ウ 「自分自身」とつなぐ手立て（主に自覚のための自己評価の方法、過去・現在・未来）

「振り返り」の場面では、互いの表現のよさを認め合い、考えを共有・交換できる場を設定することにより、互いの価値を尊重したり、自分たちなりに価値付けたことを見詰め直したりしながら、よりよい音楽を求めて主体的に活動するきっかけを生むことができる。音楽活動に終着点はない。一つの題材を終えて充実感を味わっている子どもが、学んだことを生かしてもっと自分の力を発揮したいという思いを持てるように、学びの本質に迫る「振り返り」の視点を明確にしながら記述させたり、新たな音楽と出合わせたりする。このように、自らの成長を自覚したり、自分の中にある音楽を見詰めたりすることができるようになることで、学びの過程を見詰め直しながら、育まれた資質・能力を自覚し、学んできたことの価値に気付くことができるだろう。すると子どもは、「もっと生かしたい、発揮したい」と思うようになり、学びの空間の広がりを感じられるようになってくる。過去から現在まで続いてきたことは、さらに未来へとつながり、音の記憶を広げ、深めながら、より豊かな音楽を求めて「深い学び」を実現する過程を積み重ねていくのである。

(3) 「子どもと創る『深い学び』」における（指導者）評価

ア 評価の視点

授業における楽しさや感動の場を創造しながら、子どもの様態やつぶやき、歌声や発表などから子どもの学びや育ちを評価し、指導の改善につなげる。「深い学び」を実現している姿が表れているかという視点を持ち評価していく。しかし、一人一人に次への自信や、「生かし、発揮しよう」とする意欲を持たせるものでなくてはならない。そのために、常に子どもの思いを大切にしながら、心の動きや表情の変化、表現の変容を評価の視点に基づいて見取る必要がある。仲間と共有・共鳴した感動経験や、共に音楽を創り上げていく喜びや達成感が、「深い学び」の実現につながるように、個々の評価を全体で共有したり、相互評価できる場を設定したりすることで、自己評価はより確かなものになる。そしてそれは、音楽を主体的にそうぞうすること、更には対話的で「深い学び」につながっていくと考える。

これらのことをふまえ、「深い学び」を実現している子どもの姿を、【知識・技能】【思考・判断・表現】【主体的に学習に取り組む態度】の三つの視点と関連させながら、次のようにまとめてみる。

	「深い学び」につながっていく子どもの姿	評価の視点
出 合 い	<ul style="list-style-type: none"> 新しい題材や教材に興味・関心を持ってかかわり、夢中になって音楽に没頭しながら、全身で音楽を感じようとしている。 自ら学習課題を設定し、見通しを持って前向きに課題解決しようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 音楽に実感を伴いながら理解を深め、活動への見通しを持つことができているか。 【知・技】【主】 ○ 音楽との一体感を味わいながら、どのように音楽で表現するかについて思いや考えを持っているか。 【思・判・表】【主】
追 究	<ul style="list-style-type: none"> 仲間との音楽を楽しみ共有・共鳴したりしながら、共に音楽を創り上げていく喜びや達成感を味わっている。 音楽の力で仲間とつながり、仲間とのハーモニーを感得しながら、互いの音楽への思いや表現のよさを認めたり、多様な見方・考え方に気付いたりしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 多様な考えや表現から、新たな感動や気付きを実感したり、自分の音楽に生かそうとしたりしているか。 【知・技】【思・判・表】 ○ 知性と感性の両方を働かせて音楽を捉え、価値やよさなどを見いだしているか。 【思・判・表】【主】
振 り 返 り	<ul style="list-style-type: none"> 自らの成長を実感しながら、学びの過程を見詰め直したり、より深く広がりのある音楽の本質に気付いたりできている。 これまでの音楽経験や“音の記憶”を基に、自分の表現を高めながら、より豊かな音楽を求めてそうぞうしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 豊かな感性を膨らませて生活などの関連から音楽を捉えたり、新たな音楽との出会いへの期待感を高めたりしているか。 【思・判・表】【主】

「子どもと創る『深い学び』」における指導の方針と評価

イ 評価の具体的な手立て

音楽科では、題材を通して自己評価カードを取り入れた振り返りを毎時間行っている。子どもが「自分自身」をつなぎ、前時の気付きとつなげることができるように蓄積し、心の動きや学びを丁寧に見詰めることができるようにしたい。「何ができるようになったのか」「学び方はどうだったか」といった振り返りの視点を絞り、単なる学びの振り返りに留まったりしないよう、「自分自身」で学びを見詰められる振り返りにつなげていく。そして、長い時間軸と広い空間軸の中で見えてくる、子どもの成長の見取りをより確かなものにするために、子どもの自己評価の内容から子どもの思いをより深く読み取り、より有効な音楽の活動形態や内容、知識や技能の習得に関する要素や要因を具体的に探っていく、題材構想や授業構成を吟味している。また様々な手立てを講じることで、それが子どもの姿にどのように表れるか具体的に示し、授業中の様態や発言などから見取っていく。そして、評価と実践（PDCA）を繰り返しながら、どのような目標設定や場の設定で「深い学び」を実現する過程を積み重ねていくことができるか、教科等横断的な題材構成とも関連させながら研究実践を進めていきたい。

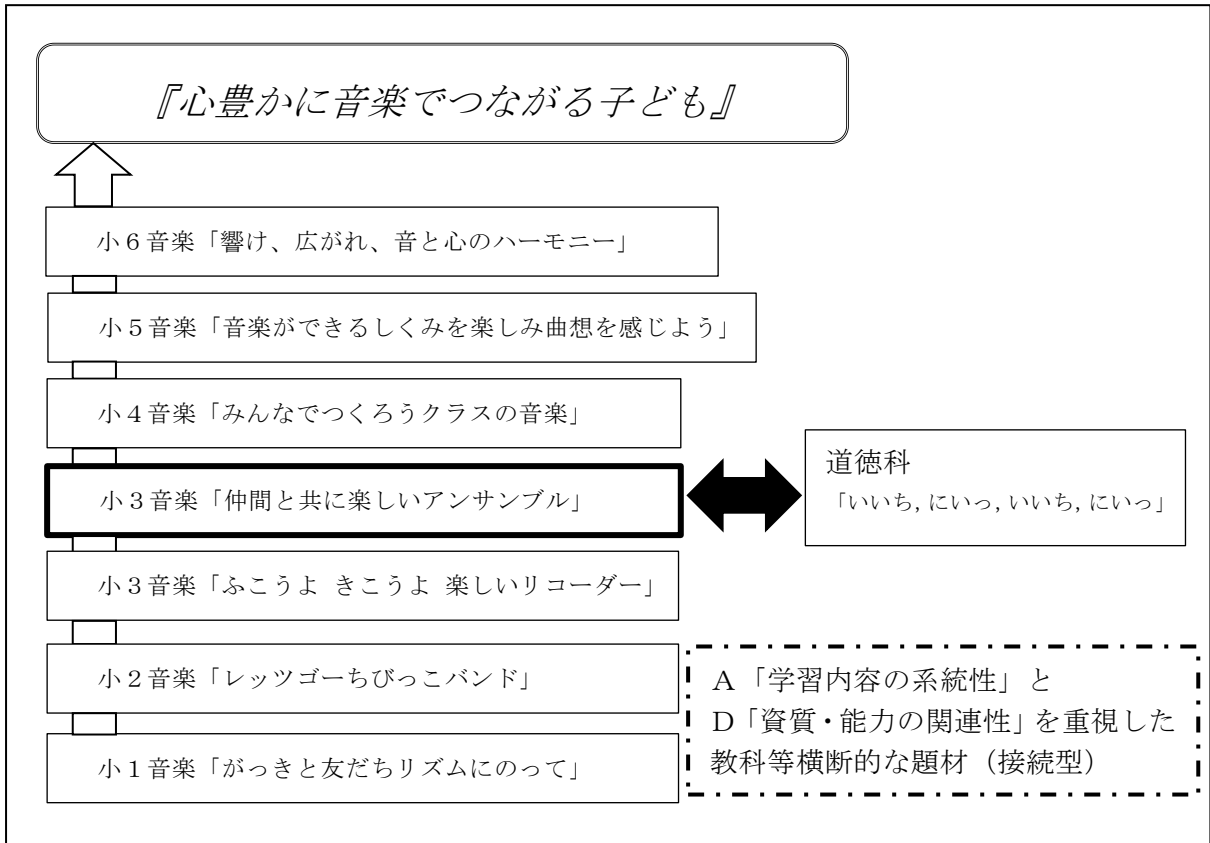
（松井 見磨）

3 実践事例

第3学年

「仲間と共に楽しいアンサンブル」 音楽科（+道徳科）

【題材全体構想について】



本学級には、音楽が好きで音楽が流れると一緒に口ずさんだり、拍子に合わせて自然に体を揺らしたりする子どもが多い。また3年生になり、リコーダーという新しい楽器に出合い、器楽合奏への関心が高まっている。前題材「ふこうよ きこうよ 楽しいリコーダー」では、リコーダー奏を楽しみながら表現の工夫を模索している姿が見られた。また、2学期に行われた「わくわくコンサート」を鑑賞し、6年生の器楽合奏に憧れを抱いた子どもも多くいた。様々な楽器を演奏したり、友達と合奏したりしたいという思いを膨らませ、それらの演奏の仕方への興味・関心が高まっている。しかし、楽器を演奏したり楽譜を読んだりする知識や技能の差は大きく、自分のパートを演奏することに精一杯になり、互いのパートを聴き合いながら演奏することに難しさを感じている子どももいる。

本題材「仲間と共に楽しいアンサンブル」では、パートの役割について初めて学習し、クラス全体の大合奏や少人数でのアンサンブルに挑戦する。子どもたちの「6年生のように息の合った演奏がしたい」という思いを大切に授業を進めていく。音楽的な「見方・考え方」を働かせながら、演奏の仕方や音量のバランスなどを工夫し、どのように演奏するかについての思いや意図を持ってほしいと考えている。また、道徳科の授業で育んだ内容項目[友情、信頼]「友達と互いに理解し、助け合っていこうとする態度」を想起させながら、互いの表現のよさを認め合い、考えを共有・交換できる場を設定する。そうすることによって表現の違いや面白さに気付いたり、自分たちなりに価値付けたことを見詰め直したりしながら、よりよい音楽を求めて主体的に活動できると考えた。

そこで、友達と聴き合ったり、認め合ったりしながら音楽的対話を繰り返すことで、心豊かに音楽でつながる子どもが育つことを願い、本題材を構想した。

【題材（音楽科）のねらい】

- 曲想と声部の役割など音楽の構造とのかかわりに気付くとともに、思いや意図に合った表現をするために、互いの楽器の音や声を聴き合ったり、合わせて演奏したりする。
- どのように演奏するかについて思いや意図を持ったり、曲想に合った表現を工夫しようとしたりする。
- 友達と協働して、声を合わせて歌ったり、合奏したりする学習に進んで取り組もうとする。

【題材の展開】（全 15 時間）

場面	子どもの課題意識と主な学習活動	評価の規準	時間
出会い	<p>私たちが楽器を組み合わせ合わせて合奏してみたいな。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ パートの音取りを進めたり、仲間と音を合わせたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 学習の見通しを持ち、様々な楽器を演奏したり、歌ったりすることに興味を持っている。 	2
追究	<p>仲間と共に楽しくアンサンブルをしよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ パートの役割について知り、アンサンブルや合奏をしながらそれぞれの楽器のバランスについて考える。 ○ 楽器の音色が重なり合う響きを感じ取ったり、聴き取ったりしながら演奏することを楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ● パートの役割を理解し、表現を工夫しながら演奏したり歌ったりしている。 ● 仲間と共に合奏や合唱奏を楽しんでいる。 	11
振り返り	<p>合奏やアンサンブルを聴き合おう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 合奏の響きを互いに聴き合う。 ○ 全員で合奏を楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 互いの演奏のよさに気付き、自分の表現に生かしている。 ● 合奏全体のまとまりについての考えを持ち、自分なりの表現をしている。 	2

【題材の実際】

（第 1・2 時）「出会い」の場面

11 月に行われた校内音楽会「わくわくコンサート」を鑑賞して、6 年生の器楽合奏に憧れを抱いている子どもに、器楽合奏に挑戦することを伝え、題材の見通しを持たせた。子どもたちは「ぼくたちも 6 年生のような演奏がしてみたい」「楽しみ」「何の楽器をやってみようかな」「お客さん呼んで発表できるといいな」など器楽合奏への意欲を高めていた。楽曲がミッキーマウス・マーチであることを知り、楽譜を見た子どもたちは「今まで見た楽譜に比べて、たくさん段がある」「メロディは鍵盤ハーモニカ



写真 1 パート練習の様子

かな」「難しそう、できるかな」「はやくみんなで合わせてみたい」など、今までに蓄積された“音の記憶”を生かし、新しい音楽との出会いを楽しんでいる様子であった。パート練習が始まると、友達と協働して譜読みを進めたり、表現を工夫しよう

としたり姿が多く見られた(写真1)。楽器を演奏したり楽譜を読んだりする知識や技能に難しさを感じている子どもも、友達と一緒に演奏したり声を掛け合ったりすることで、音楽の力で他者とつながるよさを感じながら活動していた。

(第3～11時)「追究」の場面

曲想に合った表現の工夫について考えながらパート練習を進めていった。しかし、子どもたちの振り返りシートには、「リズムや音を正確に演奏しているか」について書いている子どもが多かった。そこで、教師が「みんなが演奏するミッキーマウス・マーチのミッキーはどんな様子かな」と投げ掛けた。すると、子どもたちは「スキップして

いてルンルン!」「楽しくて、笑顔なミッキー!」「ミッキーがスキップで遠くから歩いてくる感じ」という考えや思いを伝え合った。そこで、教師が「リズムや音を一つも間違えなかったらスキップしているミッキーになるかな」「楽しくて、笑顔なミッキーになるかな」と問い掛けた。すると、子どもたちは「音色も大切かもしれない」「テンポが遅すぎるとのそのそ歩くミッキーになる」「音を短く演奏するとルンルンになるかも」など、音楽を知覚・感受しながら表現の工夫を考えることができた。

練習が進むにつれて、違う楽器同士で

集まって互いに聴き合ったり、アンサンブルをしたりしながら、よりよいものをつくり上げていこうとする姿勢や取組が自然と広がっていった。また、道徳科の授業で育んだ内容項目[友情、信頼]「友達と互いに理解し、助け合っていこうとする態度」を想起させながら、互いの表現のよさを認め合い、考えを共有・交換できる場を設定していった。そうすることによって、音楽の力で仲間とつながり、仲間の音を感じながら表現し、他者とつながるよさを感じている姿が見られた(写真2)。

子どもたちの思いや意図をより表現に生かしていくための手立てとして、教師が打楽器のバチの使い方を提案したり、子どもたちの様々な表現を全体に紹介したりした。また、子どもの発言やワークシートから音楽を形づくっている要素や音楽の仕組みにかかわる言葉を拾い上げ、共感したり賞揚したりした。そうすることで、子どもたちは音楽的な「見方・考え方」を働かせながら自分自身の“音の記憶”と向き合い、より深く自分の表現と向き合っていた。

(第14・15時)「振り返り」の場面

授業の最後に自分たちの演奏の録音を聴くことで、友達や自分の演奏のよさに気付いたり、客観的に成長を実感したりしながら、アンサンブルの楽しさを味わうことができた。また、音楽の力でつながる心地よさや音楽を創造することに喜びや手応えを感じた子どもたちは、自分

「出会い」の場面における子どもの振り返り(抜粋)

- ・ 入るタイミングがうまくできなかったけど、友達が教えてくれてできるようになった。
- ・ 友達がやさしく教えてくれたので、うれしかった。



写真2 練習風景

「追究」の場面における子どもの振り返り(抜粋)

- ・ スタッカートで楽しい表現をしたい。
- ・ ウッドブロックやピアノを聞くとテンポが取りやすい。
- ・ ミッキーがだんだん近付いてくる様子を表現したいから、最初の繰り返しのところは弱い音から始めてだんだん強くしたいな。
- ・ ルンルンした感じを表現するためには速さが大事だな。

たちの成長を見てほしい気持ちや発揮したいという思いが高まり、発表会を開催することになった（写真3）。

発表会当日は、伝えたい思いを演奏に込めて素敵な合奏を披露することができた。このように発表の機会があることで、自らの成長を自覚したり自分たちなりに価値付けたことを見詰め直したりしながら、よりよい音楽を求めて主体的に活動する姿を見ることができた。



写真3 発表会の様子

「振り返り」の場面における振り返り(抜粋)

- ・ 自分がえんそうしている時や聞いている時はきんちょうしていたけど、聞いている人によるこんでほしいと思ってえんそうすると楽しくひいたりふいたり歌ったりできました。たくさんの人が見に来てくれてとてもうれしかったです。来年の「わくわくコンサート」も楽しみです。
- ・ 強弱やスタッカートに気を付けてえんそうして、楽しくミッキーがえんそうできました。遠くからスキップしているミッキーになりました。はくしゅをもらってうれしかったです。
- ・ 先生や友達に教えてもらったことを100%いかして、今までで1番いいミッキーになりました。4年生になったらもっといい音でえんそうしたいです。
- ・ 発表会が終わった後、友達に「上手だったよ!」と言われて心があたたまりました。



【題材の成果と課題及び次年度の実践に向けて】

- 「追究」の場面で、どのように演奏するかについて思いや意図を持たせたことで、子どもは表現の工夫のよさや違いに気づき、友達の思いや考えを認め合いながら対話することができた。そして音楽をそうぞうすることに喜びや手応えを感じている姿が表れた。
- 子どもの自己評価は、視点を絞った振り返りを行ったことによって、子ども自身が自分の学びを見詰めながら練習することができた。
- 子ども一人一人が次への自信や、「生かし、発揮しよう」とする意欲を持てるような評価ができるように、「出会い」「追究」「振り返り」の学習過程において、心の動きや表情の変化、表現の変容を見取る評価を引き続き行う必要がある。
- ☆ 「深い学び」を実現する過程を積み重ねていくために、ICTの効果的な活用方法を考えていく。また、子どもたちがこれまでの経験を振り返りながら、自ら適切に学習課題を設定し、取り組んでいけるよう、教師による指導を工夫していく。

4 研究のまとめ

(1) 子どもの学びをつなぐ指導の手立てについて

ア 「出会い」の場面

- 夢中になって音楽に没頭しながら、音楽の基礎的・基本的な知識や技能を習得できる系統的な活動を常時活動として位置付けることで、これまで積み重ねてきた“音の記憶”が生かされる「出会い」となり、想像力を働かせたり学習への期待感が更に高まったりした。
- 音楽的な「見方・考え方」を働かせる場面を意図的に設定することで、音や音楽とのつながりが生まれている。また、学びに夢中になる子どもの姿を具体的に想定しながら、一人一人の実態を踏まえた指導と評価の方針を整理し直したことで、子どもの姿を見取る視点がより明確になり、子どもの思いや願いに寄り添った指導をすることができた。
- 音楽との「出会い」が、子どもの力を生かすことができ、より心の動きが伴う魅力的なものになるように、教材そのものの選択や題材へのアプローチの仕方や工夫を今後もより深めていく必要がある。また、一人一人の実態を踏まえた指導と評価の方針を整理し直し、子どもの思いや願いに寄り添った授業づくりに取り組んでいきたい。

イ 「追究」の場面

- 一人一人の個性や興味・関心を生かした楽しい音楽活動の中で、多様な人々とのかかわりを必要とする場面を意図的に創り出すことで、自然に互いの思いや考えを認め合いながら音楽をそうぞうすることに、喜びや手応えを感じている子どもの姿が見られた。
- グループの発表を聴き合える場や意見を共有できる時間を十分に保障したことで、友達や自らの表現のよさに気付いたり、子ども一人一人が自分なりに価値付けたことを見詰め直したりすることができるようになった。
- 共に音楽をそうぞうする過程を楽しむことで、音楽的な「見方・考え方」を働かせながら、自分の中に生まれる新しい気付きや価値を発見できた子どもは、さらに音楽の力を自分の“音の記憶”として根付かせていくことができている。
- 音楽の本質を見詰めて追究するそうぞうの過程や目指す音楽は十人十色であり、子ども一人一人の個性を生かしたものでなくてはならない。それぞれをしっかりと認めながら見詰めていく教師の力が大切であり、教師のかかわりが子どもの主体性をそうぞうすることとなる。

ウ 「振り返り」の場面

- 互いの表現のよさを認め合い、考えを共有・交換できる場を設定することで、互いの価値を尊重したり、自分たちなりに価値付けたことを見詰め直したりしながら、よりよい音楽を求めて主体的に活動する子どもが育ってきている。
- 振り返る視点を明らかにして自己評価させることで、自分の学びの過程を見詰めたり学んできたことの価値に気付いたり、自らの成長を自覚させたりすることができた。すると子どもは、もっと生かしたい、発揮したいと思うようになり、学びの空間の広がりを感じられた。
- 一つの題材を終えて充実感を味わっている子どもが、更に学んだことを生かし発揮したいという思いを持って、新たな出会いへの期待や展望を持てるように発達段階に応じた自己評価や相対評価の方法を、今後も継続して探っていきたい。また、自己評価の妥当性を高めていく必要があると感じた。音と共に振り返りができるように工夫したり、ICT 機器を効果的に活用したりしながら、子ども一人一人が自分の学びの価値を自覚できるようにしていくことで、自分の力で課題解決への自信を高めていくような振り返りの力を更に付けさせたい。

(2) 子どもと創る「深い学び」を評価する手立てについて

- 子ども一人一人の実態を把握し、見取りの視点を明確に持つことで、子どもの様態やつぶやき、歌声や発表などから子どもの学びや育ちを見取ることができ、明確な評価や指導の改善につながった。また、子どもが自分の学びの価値を自覚できるように、振り返る視点を与えて自己評価させることで、過去の自分と現在の自分を結び付け、そうぞうの過程をしっかりと

り振り返ることができた。

- 「深い学び」が表出した姿を見取るため、題材で育てたい資質・能力と、目指す子どもの姿を三つの観点で設定した。毎時間の授業や題材の前後で子どもの変容を見取るとともに、学習の様子や振り返りカードの記述等の幅広い空間で評価している。また、資質・能力を発揮する場としてくすのき学習を位置付けたことで、音楽科で学んだことを生かし発揮できる場が保障され、子ども一人一人が主体的にそうぞうする力を更に高めることができたことから、他教科等との学習内容の系統性や関連性に留まることなく、資質・能力の系統性や関連性を重視した題材構想の実践を続けていきたい。
- 心の動きや表情の変化、表現の変容や成長を評価することの大切さを改めて確認できた。そうぞうすることを楽しみながら学びの空間を広げていくために、各教科等の学習において身に付けさせたい資質・能力をしっかりと捉えて、広い視野と長期的な視点を持つことを大切にしながら、「深い学び」につながっていく子どもの姿を見取っていきたい。

子ども自らが「学習材」や「他者」、「自分自身」とつながり、かかわり、感動経験を重ね、心を動かしながら学ぶことができるように、意図的にそうぞうの過程において音楽的な「見方・考え方」を働かせ、他者と協働できる場を設定し、子どもと音や音楽との接点を多面的につくりながら実践を積み重ねてきた。子どもの目指す音楽と私たち教師の目指す音楽、つまり両者の活動の着地点が近付くと指導方法は明確になる。子どもが目指す音楽は一人一人異なるけれど、それをどのようにコーディネートしていくかが子どもの主体性をそうぞうすることとなるのではないだろうか。“音楽を教える”のではなく“音楽で育む”という原点を忘れず、教師自身が音楽と深くかかわりながら、子どもと共に音楽に夢中になれる時間を共有していきたい。

(松井 見磨)

5 研究協力者から

コロナ禍の状況の中で子どもたちが音楽を通して心豊かにつながろうとする場面を授業の中で拝見いたしました。やはり、子どもたちは音楽に夢中になるとその中で楽しみたい、うまくなりたいという気持ちを持っていることがよく分かりました。

「出会い」の場面では、いかに子どもに楽曲の力や面白さを体感させるかが重要だと感じました。その方法は題材構想や子どもの実態によって様々ですが、いかにその楽曲の面白さを理解しておくことが大切だと感じました。「追究」の場面では、いかに子ども同士がかかわり合えるかが大切だと思いました。仲間と合わせて感じたり、仲間と認め合ったりする活動が音楽の力を自分のものへと体感していく活動であると確認することができました。「振り返り」の場面では、自分の音楽への取組を見詰め直して、自分の中の音楽を改めて確認していこうとすることができていました。しかし、この時間も音楽そのものに関わりながら振り返ることができるだけでなく、時間の使い方が有効になると感じました。その方法としては、活動や題材の毎の「振り返り」と「出会い」をつなげていくことができると感じています。

評価はとても大切な活動です。しかしながら、音楽の評価を他の教科等と同じように振り返りカードや自己評価表等で見詰めるのだけではなく、子どもたちの音楽活動の中での表情や表現や発表を通してできると良いなと思いました。それは、簡単なことではありません。子ども一人一人の活動をしっかりと見詰めながら、音楽活動を進めなければならないからです。しかし、うまく評価カードを書くことよりも、より音楽に寄り添って、新たに音楽にかかわってける時間が大切だと思っています。そのためにも、音楽の評価活動は子どもの見取りをどうするかについてさらに研究が進められるとより深い音楽の評価活動になっていくと思っています。

子どもたちと共に自分自身の楽曲への思いや表現が日々高まっていくことを大切に学ばせていただきます。ありがとうございました。

(愛媛大学 楠 俊明)